Ⅲ-8　桑名市

－平成のまちづくりに挑む－

１．都市概況

(1)基礎データ　＜2000 年国勢調査＞

○人口：108,378 人　（三重県第 5 位）

○人口増加率（1995～2000 年）：4.9%

○世帯数：37,011 世帯

○高齢化率：15.5%（三重県平均：18.9%）

○面積：57.39k ㎡

(2)都市の沿革

木曽三川の河口に位置することから、古代から水運が発達。室町時代には「十楽の津」ともいわれた。江戸時代に徳川四天王の 1 人、本多忠勝の「慶長の町割」による城下町づくりが行われるとともに、東海道の宿駅を制定。城下町、宿場町として発展した。

名古屋駅から鉄道で 20 分の位置にあり、高度成長期には、名古屋都市圏の人口の受け皿として西部丘陵地の市有林や国有林を活用した大規模団地開発が行われ、人口が急増。現在のニュータウンの人口は 2.7 万人。ニュータウン建設以降の人口増加のほぼ 100%をニュータウンで受け入れていることになる。

桑名と蛤

「その手は桑名の焼き蛤」ということわざがあるほどだが、十返舎一九の「東海道中膝栗毛」の中でも松かさの火でやいた香ばしい蛤が売られている様子が描かれている。

桑名は三大河川の河口に位置しており、蛤の生育に適した環境にあり、現在でも日本有数の産地である。しかし、河川の環境の悪化から水揚が減っており、市内で販売されているしぐれ蛤の原料はほとんどが北朝鮮や中国からの輸入となっている。

市内のマンホール

蛤料理の店も多い

(3)主要産業

日立金属、ＮＴＮ、鋳物産業、時雨の貝新、サンジルシ醸造など。

主な商業施設には、マイカル桑名（店舗面積：5.3 万㎡、年間売り上げ：280 億円程度）、アピタ（店舗面積：1.5 万㎡、年間売り上げ：180 億円程度）がある。

２．中心市街地の現況と課題

(1)中心市街地の範囲

・桑名駅から城下町を含む約 185ha。

・以下の３つのゾーンより構成される。

○駅周辺：都市の利便性を高めるゾーン

○旧城下町；歴史文化自然環境に恵まれ、心身の健康と豊かさを育むゾーン

○その間の地区：公共公益施設が集積し、市民生活を支えるゾーン

(2)基礎データ　＜2000 年国勢調査＞

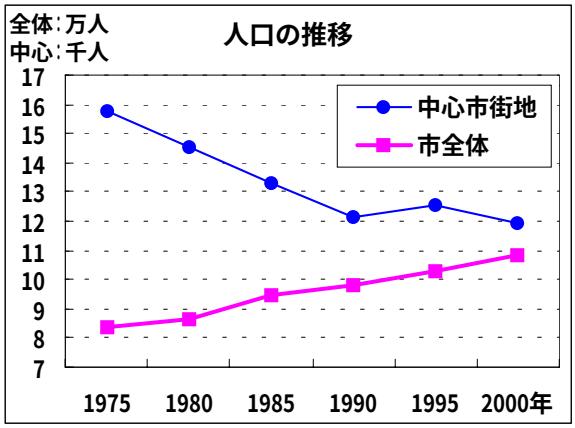
○人口：11,927 人　（市全体の 11.0%）

○人口増加率（1995～2000 年）：－5.0%

○世帯数：4,356 世帯

○人口密度：57.0 人／ha

○高齢化率：19.7%（1995 年）



(3)土地・建物の利用状況

鉄道駅は城下町から西 1km のところに開設された。これを契機に駅周辺の開発が進み、駅と城下町を結ぶ道路として、八間通りが整備された。

戦災によって大きな被害を受けたが、戦後の大

規模な戦災復興事業により、20 年の歳月をかけ 1966 年に中心市街地の基盤整備がほぼできあがった。戦災によって建物は焼失してしまったが、幹線道路を除くと、堀や生活道路は、ほぼ江戸時代の町割によってつくられた街路が大切にされ、それらを踏襲している。

復興事業からはずれた桑名駅周辺の整備についても 1960 年頃から話題となり、その最初として、駅東の再開発にむけて 1965 年から地元に入り、1969 年に都市計画決定、1972 年にパルビルが完成、1977 年の北勢線の整備完了によって再開発事業は完結した。この再開発事業は事業着手全国第 1 号であり、市民のみならず、北勢地方の人々のあこがれとして大変な賑わいを見せたという。

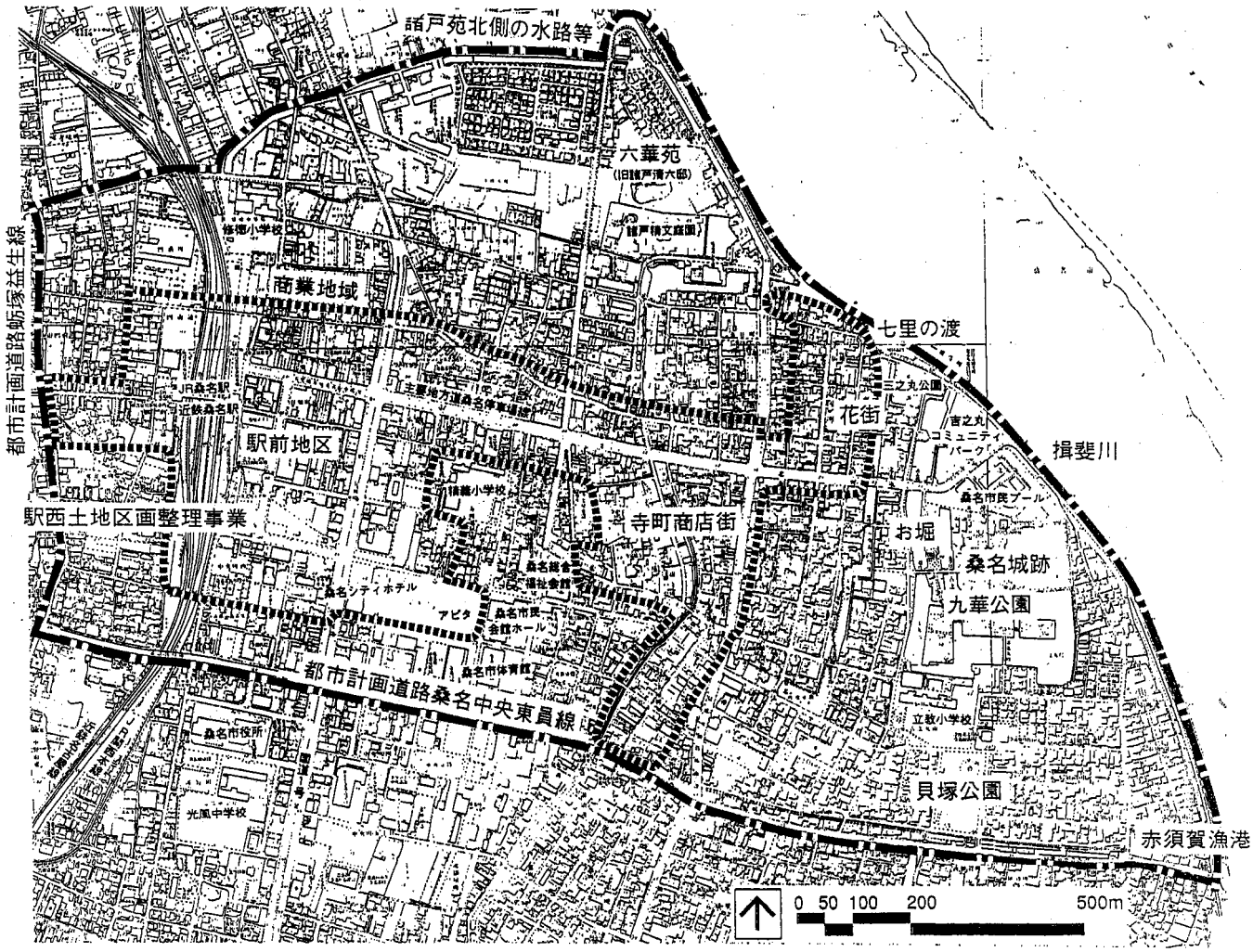
駅西については、区画整理の実施をねらったが、行政主導のやり方に住民が反発し中断。それから当分の間、駅西は、道路補修も行われないまま放置された。鉄道によって駅東と分断されているため、駅西は駅に近接しているものの利便性に欠ける地区となり、市街地の発展から取り残された。

(4)市街地の動向

中心市街地の人口は、工場跡地などにおけるマンション供給によって増加している地区もあるが、全体としては減少傾向にある。しかし、まちなかに戻ってくる人の動きもみられ、伝統ある石取祭は今も市民の生活に深く根づいている。旧城下町の寺町商店街では三八市が定期的に開催され、近郊から持ちこまれる農産物や海産物が格安で販売され、大いに賑わっている。このほかにも様々なイベントが開催され、活気のある商店街として知られている。

しかし、駅前の商店街ではパルビルの撤退以降、商業が転出し、空店舗が増えており、駅前の賑わいに欠けている。

中心市街地の範囲（約 185ha）



３．中心市街地活性化のとりくみ

(1)活性化基本計画の内容

●計画提出日：1999 年 5 月 13 日

●基本的な方向

1）総合的な生活拠点の形成

2）観光交流拠点の形成

3）アイデンティティあふれる街づくりの推進

●計画の特徴

中心市街地内にある桑名固有の歴史・文化資産（七里の渡、諸戸精文庭園、六華苑、九華公園、旧東海道等）を活用した街なか観光を積極的に進めていくとともに、それらと連動した商業振興、環境整備等を進めていく。さらに、駅西地区、駅東地区の面整備を進め抜本的な都市施設の改善を行うとともに、桑名市の玄関口（ゲート）としての機能集積を図る。

駅周辺の基盤再整備と城下町としての個性を活かした観光開発を２つの大きな軸として桑名コンパクト都心の形成を図る。

また、中心市街地活性化法の事業メニューの他に、桑名市独自の助成制度等の検討を行い、集中的な施策展開と投資による効率的な活性化を目指す。従来の振興組合や発展会といった組織への助成制度にあわせて、個店単位、NPO 等への助成も併せて検討する。(民間の計画立案への助成、イベント等の開催、街なか美術館・博物館等)

(2)行政の取組み

●歴みち事業

城下町としての個性を生かした観光開発の１つとして成果をあげているものが歴みち事業である。この取組みのきっかけは、1990 年 3 月策定の都市景観形成基本計画である。1991 年 3 月にはうるおい・緑・景観モデル都市に選ばれ、これを受けて、緑の回遊ルート計画を策定し、八間通のシンボルロードが整備された。

一方、旧市街地の寺町商店街では、1993 年度に自主調査が実施され、それをもとに外堀の整備について市への提案が行われた。

これを受ける形で、1996 年度に三重大学の浅野研究室の協力を得て、ワークショップによる歴道事業の計画づくりが行われ, 1998 年度に歴みち事業の事業採択を受けた。

桑名城外堀線については、堀の復活に取り組んでおり、1998 年に都市計画変更を行い、2004 年度の完成にむけて整備をすすめている。ちなみに通常、都市計画道路の名称は起終点の地名が使われるが、ここでは外堀の名称を使うことにこだわり、それが認められた。

＜桑名城外堀線の概要＞

出典：桑名市発行パンフレット「まちづくり総合支援事業」

●駅西土地区画整理事業

桑名市は戦災復興による区画整理と昭和 40 年代の駅東の再開発事業によって中心市街地の基盤整備が行われており、残された課題といえるのが駅西地区であった。この地区の整備は 30 年来の悲願であり、1992 年から仕切直しということで地元に入った。ようやく地元が了解し、2000 年に都市計画変更、2001 年 9 月に事業認可を受け、先行買収に入っている。地区面積 26.2ha。総事業費 260 億円。うち、移転補償費が 170 億円。年間に投資できる予算は 10 億円程度であり、息の長い事業になると考えられている。

まちづくり協議会が立ちあがり、将来のまちづくりの方向について、ワークショップ方式による検討がすすめられている。

(3)住民のまちづくりへのかかわり

桑名市においては、ハードの整備については一定の成果が得られており、今後はそのまちを市民がどのように使っていくかが重要であり、それをサポートしていくための様々な試みが展開されている。

●平成のまちづくり「桑名ルネッサンス」の開催

その 1 つが、慶長の町割から 400 年にあたる 2001 年に開催された平成のまちづくり「桑名ルネッサンス」～東海道宿駅制定・桑名開府 400 年記念事業～である。この年をまちづくり元年として位置づけ、産業発展やまちづくりの共有を図るため、1 年前から企業と市民などから構成される事業組織を立ち上げ、商店街の探検をはじめ 100 回近いイベントが実施された。

この取組みは「平成の町割会」から「そういんまちのファンクラブ」へと続く市民団体のネットワーク形成にも大きな力となったといえる。

●まちづくりブックの作成

本の表紙

上記の一環として市民参加の編集委員会を発足し、取組まれたものであるが、編集委員の桑名に対する熱い思いから本の構成を決めるまでに時間がかかり、編集委員会 22 回、そのほかにも現地調査やインタビュー調査、市民参加の試読会などを実施し、2 年半かかって完成した。

市民にまちに愛着をもってもらい、市民との協働によってまちづくりを進めていくきっかけとなることをねらいとしたもので、桑名の暮らしの豊かさとまちづくりの歴史に着目し、そこからまちをつくりあげるための様々な力＝「まちづくり市民力」を導き出し、その力を知り、身につけ、実践することが「まちづくりの極意」であるとしている。さらに、実際にまちに接近するための手ほどきを「まちを識（し）る術（すべ）」として紹介している。

編集委員会は本の発行後も蛤倶楽部として出前講座の実施など、この本を活用した取組みを展開することとしており、この本がきっかけとなって新しいまちづくりが展開することが期待される。

●歩いて暮らせるまちづくりの取組み

「歩いて暮らせる街づくり」は小渕内閣の経済新生対策において位置づけられ、全国で 30 地区のモデルプロジェクトが指定され、桑名市もその 1 つに選ばれた。桑名市では、これまで中心市街地で様々な取組みが行われていたが、必ずしも中心部の将来像への共通認識のもとにそれぞれの事業が進められてきたとはいえない状況にあった。歩いて暮らせるまちづくりはこれまでバラバラに行われてきた各種事業を統一したコンセプトのもとで進めるとともに、まちを使いこなしていこうというものであり、市民が主体となって進めていくことを意図している。

2001 年度には、歩いて暮らせる街づくり構想を策定するとともに、まち歩きガイドマップづくりワークショップを開催し、その成果を「水のめぐみ」マップとしてとりまとめた。

2002 年度には市民参加の実行委員会を立ち上げ、ニュータウンから城下町を歩く「桑名ワンデイウォーク」が開催された。このウォークは継続して実施することとしており、市民との協働の取組みが広がっていくことが期待される。

「水のめぐみ」マップとワンデイウォーク参加証

桑名駅前・PAL ビル

昭和 47 年に完成した再開発ビル。テナントの撤退で空ビルとなっていたが、優良建築物事業による再再開発を実施予定。

八間通

旧城下町と駅前を結ぶシンボルロード。電線類の地中化など景観整備が行われた。

寺町商店街（三八市）

3 と 8 がつく日に開催される市。近郊から持ちこまれる農産物や海産物が格安で販売され、大いに賑わう。

花街（旧東海道）

七里の渡しを降りたところ。老舗料亭が並ぶ。御台所祭の時には、ここがグルメパークとなり、はまぐり料理をはじめ様々な味が楽しめる空間となる。

寺町堀の再整備

歴みち事業により、寺町商店街の裏にあった堀を再生する事業が進行中。残念ながら堀に水が入るのは早くても 2004 年 4 月という。

住吉入り江の整備

これも歴みち事業による整備。かつては環境衛生上問題が多く、周辺への景観阻害の原因となっていたところが魅力的な水辺空間としてよみがえった。正面に見えるのが諸戸氏庭園。

４．事例からみた教訓と今後の課題

●駅前の再生の重要性

桑名市はニュータウン建設による住宅都市と城下町、宿場町という歴史都市としての性格を有する都市である。しかし、現在の桑名駅前をみると、かつては先進的な都市づくりの象徴であった再開発ビルが空きビル化してしまったために活気を失い、様々な資源をもつ都市の魅力が提示されていない。はじめて駅に降り立った人はこのまちが慶長の町割から400年もの歴史を有することを感じることはできないであろう。

中心市街地の活性化の中で街なか観光が目標としてあげられているが、来街者の玄関となる駅前の再生が極めて重要である。長い間、懸念となっていたパルビルの再再開発が始動したことにより、その周辺も含めた再整備が期待される。

●時代にあった土地利用転換がまちに活気を

駅と城下町の間の地区の土地利用が時代とともに変化し、それがまちに活気を与えている。当初、農地だったところが、工業化の進展の中で鋳物工場として活用され、桑名市の発展を支えた。その後、工場の郊外移転によってできた跡地が公共用地や大規模商業施設として活用され、さらにマンション用地として、まちなか居住を支えている。変化に対応できる空間を有していたことが、まちの賑わい形成に大いに役立ったといえよう。

六華苑と諸戸氏庭園

諸戸氏は全国でも指折りの大地主であり、その邸宅が六華苑と諸戸氏庭園として公開されている。

六華苑は大正２年創建。コンドルの設計による洋館と和風建築及びその前庭の池泉回遊式庭園などがあり、明治・大正期を代表する貴重な文化遺産である。

●地域資源をまちづくりに活かす

旧城下町では六華苑の整備や諸戸庭園の開放など、歴史的建築物の活用が進められるとともに、歴みち事業により、地域の資源を活かした魅力づくりが進められている。

さらに、桑名市では単にハード面での整備を進めるだけではなく、これらを市民がいかに使いこなすかというところまでを視点に入れ、様々な取組みが展開されているのは学ぶべき点である。ボランティアによる歴史の案内人の存在や市民による御台所祭の開催などは、行政がしかけ、市民との協働ですすめている好例であるといえる。このような中で、まちづくりに関わる人々も増えている。まちづくりブックの作成に際し、様々な分野の方にインタビュー調査を実施したのだが、それぞれの方が桑名というまちに深い愛着を持ち、いろいろな場で活動されていることに大きな驚きを覚えた。まちづくりは人づくりとよくいわれるが、まさにその実践がされているのが桑名ではないかと感じた。

●行政担当者の個性に注目

このような取組みがうまくいった背景には、石取祭という伝統的なまつりの存在が地域のアイデンティティとして存在し、地域コミュニティを堅固なものとしていることがあげられるが、行政の担当者の個性にも注目したい。

まちづくり総合支援事業をうまく活用し、「まちづくりブック」を作成したり、歩いて暮らせる街づくりのモデル地区指定をきっかけに、市民参加によるウォーキングのイベントをしかけたりしている。行政の枠にとらわれないユニークな取組みがまちの魅力づくりに多いに役立っているといえよう。

（石田 富男）

参考資料

1. 「くわな」まちづくりブック編集委員会著「まちづくり極意 くわな流」2003.3 中日出版社
2. 桑名市、桑名市中心市街地活性化基本計画策定調査、1999.3
3. 桑名市教育委員会「志るべ石－桑名史跡めぐり－」1991.3